

雲のおぢ坊

富島健夫

雲のおぎん坊

雲のあばれん坊

一九八二年二月二五日 第一刷発行

定 価 八八〇円

著 者 富島健夫

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇―

電話 出版部 二三八―二八四二
販売部 二三八―二七八一

印刷所 図書印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

目

次

初恋の人

聖女の願望

秘密

花の愛撫

ある同棲

母親上京

学生結婚

七

二七

五三

七三

九四

一〇七

一二七

誘惑の夜

二四七

処女の場合

二五七

少女論客

二六八

『婚約者』出現

二七五

美女と仙人

二八六

強姦

二四八

装画・装幀
深井
国

雲のあばれん坊

初恋の人

面倒なので、めしは一度に釜一杯炊いてある。愛川直角は、それを使ってやきめしを作っていた。

そこへ、松本新一が帰って来た。良いタイミングである。「一人で帰って来たのか？」

直角がそう問うたのは、松本はときどき女をくわえ込んで来るからである。

「ああ、一人だ」

やがて二人は食卓で向き合い、早い夕食を食べはじめた。夕食は早くてもよい。夜中に腹が空れば、また食べれば良いのである。

「このごろ、妙なものが流行っているそうだ」

と松本が言った。

「ほう」

「辻斬りならぬ辻投げだよ。道ですれちがいざま、ヤツと腕をつかみ、体をひねって相手を背負い、路上にたたきつける。そのまま、何事もなかった顔で歩いて行く。投げられた男は、相手の強いのを思い知らされたばかりだから、追うことが出来ない。いや、しばらく起き上がれない。そ

れを、投げたやつの相棒が見下ろしてせせら笑うんだそう
だ。投げられた人間は、二重の屈辱を受けることになる」

「柔道部の連中だな」

「だろうな」

「悪質ないはずだ。打ちどころが悪ければ、怪我をする」

「そうなる。向こうから女の子が歩いて来ているときを狙うらしい。なるべく大きな男を対象とする。投げ甲斐があるんだろうな」

「けしからん、スポーツマンシップに反する」

「スポーツマンどもに、シップも精神もあるものか。あれは、タテマエに過ぎない。ないからこそ、唱えているんだ。知性のないゴロツキの集団だよ。あたまが悪いから、からだを鍛える。大学を運動場と心得ている」

「たしかに、そういう連中は多いな。しかし、まともなスポーツマンも多いぞ。ふむ。一度、その辻投げに会ってみたいものだ。だいたいどのあたりに出没するんだ？」

「淑星女子大から駅に向かう途中らしい。彼女たちの下校時間だよ」

「よし。あした、その辺をのんびりと歩いてみよう」

あくる日の夕方、直角と松本は、その通りを歩いた。並んで歩かない。直角が前を歩き、五メートルあとを松本が歩く。

直角を狙ってくれば問題はない。

直角とすれちがった男が松本を投げようとしたとき、すぐに直角がとって返して相手を封じなければならぬ。そのため、直角はぼんやりした顔をしながらも、向こうから来る男や立っている男に気をつけていた。

銀行があった。すでにシャッターは下りている。その前に、人待ち顔に学生らしい男がたたずんでいた。

坊主あたまだ。からだのかまえ目の配り、
(こいつ、柔道をやっている)

直角はそう感じた。

からだの力を抜き、口を半開きにして、のろのろとその前を通る。

殺気を感じた。

(来るぞ)

しかし、殺気は外れた。相手は、直角のうしろの松本に目を転じたようだ。直角は前方を見ながら、視野のなかで相手が動くのを見た。

二歩三歩と進んだあと、にわかに直角はまわれ右をした。たたずんでいた男は、ちょうど松本を背負ったところであった。

くり返し直角は、胸に肩を入れたときの心得を、松本に講義してある。実演してもいる。で、松本は腰を落として重心を沈めようとしていた。もがいていた。

二人の背後には、淑星女子大の学生たちが三、四人こちらに向かっている。

直角の足は地を蹴った。同時に、固めた右の拳が宙を唸った。

それは正確に走り、相手の頬にぶつかった。

けだものの声を発して、相手のからだは傾き、松本から手を離れた。松本は尻餅をつき、相手はよろめいた。

そこへ、直角の左腕が襲った。相手はキリモミ状態になる。直角は左腕を連打した。独*衆をまわす鞭と同じである。相手はさらに舞い、舞いながら重心をくずし、倒れた。

そのときはもう、松本は起きていた。

「おい」

直角は相手の肩を蹴った。

「どういうわけで投げようとした？」

そのとき、直角の背後に、もう一人の坊主あたまが突進してきた。

辻投げたちは複数だと聞いている直角は、そいつの出現を待っていた。直角の腕をつかまえに來たそいつの腕を、手刀でたたき、顔をしかめる余裕も与えずにそのあごに頭突きを食らわせた。そいつはのけぞる。その耳に左の拳を浴びせる。そいつは舞踏もしないで引っくり返った。

淑星女子大の学生たちは、かなり離れたところで立ち止ってこちらを見ている。

松本は彼女たちに手を振り、

「心配ありませんよ。この通り、無法者は退治しました」と言った。

直角は二人目を引きずって最初の男と並べた。

「おまえら、どこの柔道部だ？」

「……………」

「腕が痛いかな？ 耳鳴りがするか？ 折れないように手加減した。鼓膜も破れてはおらんじやろう。安心せい。いいか、二度とこんなまねをしてみろ、そのときは腕も足もへし折ってくれるぞ」

すでに相手に闘志のないことは察していたが、それでも寝技をかけられるのを警戒して、直角は適当な間隔を保っていた。二人は前後して、のろのろと上体を起こした。

「顔を上げい」

上げた顔は、なるほど知能指数の低さをあらわしていた。

「立って、去れっ」

二人は助け合って起きた。

直角は言った。

「久しぶりだから、汗をかいたわい。ビール代を置いて行ったらどうだ？」

一人がズボンのポケットから金を出した。かなりの札束である。土地成金の阿呆息子か悪徳医師のガキか。

直角はそれを全部引ったくり、半分だけ返した。

「行けい」

二人は足を引きずりながら歩き出した。腕を組んでそれをにらみつけていた直角の耳に、やさしい女の声が聞こえた。

「何があったの？」

ふり向くと、田中早苗が松本を見上げていた。

「よう、見ていたのかい？」

松本ははずんだ声を出した。

「辻投げをこらしめてやったんだ。おまけに教授料をもらった。生ビールでも呑みに行こう」

早苗は直角に、

「今日は」

とあたまを下げた。松本には挨拶抜きだったのだ。そのことは、早苗がどちらと親しいかを示している。

「おお、あいかわらずきれいじゃのう」

これは直角の一つおぼえである。女の子にはお世辞を言いなさい、と母親に諭されて以来、ずっと口にしてている。他のお世辞を思いつかないので、これ一つで通している。もう早苗には何十回も言った。

早苗はうれしそうに微笑した。

「ありがとう。あたし、直角さんの強いところ、はじめて見たわ」

直角はゆっくりと首を振った。

「ぼくが強いんじゃないとです。向こうが弱過ぎた。運が良かったとです」

三人はビヤホールに入った。入る前直角は松本に、「おれは金を使うのが苦手だから、おまえが払ってくれ」と言つて、辻投げから頂いた金を松本に渡した。金と女を使うのは、松本の得意なのである。

大ジョッキで乾盃する。早苗はきれいな咽喉のどを見せてビールを呑んだ。

直角は一息にビールを干した。

早苗は目を丸くしてそれを見る。

「豪快ね」

あらかじめ松本はそれを心得ていて、直角の前には二杯目のジョッキがある。

「ビールは最初の一杯が一番うまい」

直角は二杯目を持ち、松本は辻投げ退治のいきさつを説明しはじめた。

「あたしも、二度、投げるのを見たことがあるわ。投げられた人、かあいそうだったわ。それなのに、あたしの友だちは、投げた人がかっこういいんだって」

「感覚が狂つとる」

直角は無然とした表情でつぶやいた。

その直角が洗面所に立ったあと、早苗はテーブルの上で

松本の指に指をからませた。ビールで頬はあからみ、目は潤み、たいへん艶めかしくなっている。

「今夜、だめ？」

「いや、いいよ。どこかであいつをまこう。きみの部屋でいいだろう？」

「泊まってよ。夜中に帰られるの、さびしいの」

「あしたの講義は午後からだからな。泊まってもいい」

「うれしい」

指に力がこもった。すでにからだも濡れて来ているようだ。

「ところで、あの直角さん、まだ童貞なの？」

「そうだと思うよ」

「欲しくないのかしら？」

「いや、欲しがっているよ」

松本は上体を早苗のほうに傾けた。

「朝、隣のふとんに寝ている。ふとんをはいでいることもある。大の字になって、いびきをかきながら、テントを張っているんだ」

「まあ」

早苗の目がさらに潤む。目の奥にかげろうが揺らいだ。

「羞恥心の強い男なんだ。ほかのことには度胸があるのに、女に関してはからきしだらしが無い。それに、高校時代の初恋の子を、まだ忘れていない」

「その子とも、何もなかったの？」

「あいつの片思いさ。ただひたすら純情に、ひそかにあこがれていた。向こうは気がついていまいなかった」

「その子、あなたが手を出したの？」

「いや」

急に、松本はきびしい顔になった。

「チャーミングな子で、色気もあったから、手を出したかったよ。手を出せば、なびいていたな。しかし、親友が純情を捧げているんだ。その子だけは遠慮した。友情は祖国より重い」

「それであの、欲望はどう処理しているの、自分でしているの？」

「さあ、どうかな？ きみから質問してみろよ」

「そうしようかしら？」

直角が帰って来た。巨体で、椅子はちゃちである。にもかかわらず、きしませもしないで腰かける。

「おい直角。早苗が質問したいそうだ」

「ほう」

直角は早苗のほうを向いた。

「いかなることですか？」

「あのね」

早苗は直角の腕に手を触れた。そっと撫でるしぐさをしながら、

「直角さん、どんなタイプの女性が好きなのかしら？」

さすが、女である。松本に投げかけた疑問は口にしな

「考えたことがあります」

「考えてみて」

「そりゃ、女らしくやさしくて明かるくてかしこい人が好い」

「あたしの友だちに、直角さんに会いたがっている子がいるの。今度、紹介させて」

「はあ」

直角の顔にはじらいの色がにじんだ。

「それはいいことだ」

と松本が言った。

「おまえもそろそろ女の子と交際して、人間学を勉強しなきゃいかん」

「ぼくは」

直角は告白する口調で言った。

「交際が下手なんです。女の子と会っても退屈させるだけです」

「それは人によると思うわ。その子、直角さんみたいな人を好きなの。ほんとうを言うと、あたしだってそうよ」

「ぼくも」

と直角はまじめな顔で答えた。

「早苗さんみたいな人が好きです」

「おお」

松本は大きくうなずいた。

「それじゃ、友だちを紹介するまでもない。直角とはきみがつきあえばいい」

「あら、いいの？」

「賛成だよ。今夜さっそく、きみの部屋に連れて帰れよ」

「泊まりに来てくれる？」

「とんでもない」

直角の顔はあかくなった。

「ぼくはいびきが大きいから、だめです」

「あら、そのほうが頼もしいわ。男がいびきをかくのは、自分の存在を知らせて外敵から女を守るためですって」

その早苗が洗面所に立った。男も女も、ビールを呑めば小便が近くなる。これは自然な現象である。

「ほんとうに、おまえ、あの子の部屋に行かないか？ 飲待してくれるぞ。朝めしを作ってくれるぞ」

「冗談を言うな」

直角がもうあかくならず、首を振った。

「あの人はおれをからかっただけだ」

「じゃ、あの子の友だちとつきあえ」

「退屈させるだけだ」

「会ってみなきゃわからん。とにかくそれじゃ、今夜はおれはあの子の部屋に行くからな、おまえ、一人で帰れ」

松本は預かった金の一部を直角に返した。

「これはタクシー代だ」

「うん」

直角は金をポケットに入れた。松本は声をひそめた。

「あの子はな、さつき、別の質問をしたかったんだぞ」

その内容を伝えた。

「ばかな」

直角は苦笑した。

「おまえもどうかしとる。この年して、童貞であるわけがない」

「いや、女の子というのは、童貞に興味を持って自分がその男の最初の女になりたがる場合があるんだ。それにおまえは、童貞と言っても信じられるムードを持っている。そう思わせておけ」

「ま、おれはそぎゃんことはどうでもよか」

早苗はなかなかもどって来ない。洗面所で顔を直しているのだろう。

直角は松本に言った。

「じゃ、おれはもう帰るぞ。呑むとやたらと眠くなる」

「ま、もう一杯だけつきあえ」

松本はウェ이터を呼び、生ビールを注文した。

「あの子も、おまえが多くの女の子とつきあっていることを知っているのか？」

「もちろん。それはもう最初に話してある」

「それでよく平気なものだな。女の心理はわからん」

「向こうだっておれだけじゃないだろう。ま、おたがいに遊びさ」

早苗がもどって来て、替って松本が立って行った。

早苗が言った。

「さっき言った友だち、電話をかけて呼びましょうか？」

「いや」

直角は手を振った。

「今度にしてください。ぼくはもう、部屋に帰って眠ります」

「もう？」

「寝るのが最高の楽しみです。時間があれば眠ります。眠れば、腹が立つこともない」

「一人で？」

「もちろん、そうです」

三十分後、直角は松本と早苗に別れを告げて、そのピヤホールを出た。

アパートに着いたときは、もう夜になっていた。

見上げた自分の部屋に、電灯が点っている。住んでいるのは、直角と松本だけだ。松本が気を変えたにしても、自分より先きに着くとは考えられない。

(だれだ?)

ドアにはカギがかかっていたはずだ。直角は急いで階段を上った。

直角の胸はずんだ。てっきり、新米の間抜けな空巢狙いにちがいない、そう思ったのである。

そうであった場合は、用心しなけりやならない。

刃物を持っている場合がある。

刃物ならまだいい。刃物は、腕と刃の長さしか伸びない。投げられても、かわせばよい。

飛道具がこわい。近ごろ、チンピラがやたらと短銃を持って歩いている。そして臆病なやつほど、それをぶっ放す。

用心して、直角はドアに進んだ。

ドアは閉められていた。

窓から飛び降りたら怪我するのは必定である。出入口はこのドアしかない。こんなポロアパートに侵入するとは、ドジな泥棒ではないか。

もう、文字通りに袋のねずみだ。

柱に耳を当て、様子をうかがう。

静かである。物音はしていない。

息を凝らす。心を集中した。部屋のたたずまいが目につく。

へんな話だが、松本の机の前の壁に貼られてある女優の

ヌード写真がまっさきに浮かんた。

(こりゃ、欲求不満の証拠かも知らんぞ)

殺氣が感じられない。たとえこそ泥でも、室内にいる者が悪事を働いているならば、それが伝わって来てもよい。伝わって来ないのである。

ビールのせいかも知れないし、それほど間抜けなやつかも知れない。

(よし)

決断した。このまま相手の仕事すすむのを待つほど、氣は長くない。

ドアのノブに手をかけ、まわした。ドアは開かれた。鍵をかけて出たのだから、だれかがいるのはたしかだ。

顔だけ出して部屋を見た。

部屋の中央に、女が正座していた。女の膝に、本があった。

女か？

拍子抜けして、直角は部屋に入った。

女はこちらを向いた。女でも、泥棒ではないとは言えない。しかし、端然と座っている女のからだの線には、そのような気配はなかった。

(松本を訪ねて来た女だ)

そう思いながら歩き、その顔を見て、直角は立ちすくんだ。

「あなたは」

「今晚は」

安岐珠美であった。直角を見上げ、会釈した。

「すみません、留守中なのに。管理人のおばさんが、さつさと開けて入れてくれてしまったんです。すみません」

珠美の横には旅行鞆があった。

「おどろいたなあ、あなたをこの部屋で見るなんて」

直角は珠美の前に正座した。珠美はあらためてしとやかに挨拶してきた。

「しばらくでした。お元氣なことは、いろんな人から聞いていました」

「いったい、どうしたんですか？」

「家出して来たの。理由はありふれたこと。いやな男と結婚させられそうになったから」

「結婚？」

大学三年の直角には、それはまだ遠い話である。しかし、一つ年上の珠美は、女ではあるし、現実の問題であろう。

「そうなの。好きになれない人なの。それで、いやだということを示すための家出。古めかしい話でしょう？」

「うん。そんな家出なら、賛成です」

直角は敬語を使っている。これは、珠美が女だから、というだけではない。高校で一年以上級で、しかも直角にとっては聖なる存在だからである。珠美の顔を見たときの驚愕